

### 懲罰軍カランサ軍と衝突する

カランサは深刻な問題に直面していた。内紛の激戦地は数箇所を亘り、弾薬は不足し、急激なインフレにより経済が崩壊する中、始まったばかりの政権を支え、必需物資を購入する財源は枯渇していた。北の国境ではアメリカによる新たな侵略が始まっていた。カランサに国内を安定させる力がなかったことで、ピヤにアメリカ介入の口実を作らせ、グレンスプリングスやウエップ＝サンイグナチオ襲撃隊の跡を追いかけて、アメリカ軍が侵入していた。カランサにとり政治的に最も信頼の置ける部下、パブロ・ゴンザレスとエミリアノ・ナファラテはピヤのコロンバス襲撃に同調してPSDを使ってアメリカ軍を刺激した。そのためカランサはワシントンから益々信用をなくしていた。

カランサは国内で支持を失うことを恐れ、ウイルソンへ全面協力をするわけにできなかった。しかし、内戦を勝ち抜くためには外国の援助、武器や金が必要だった。勝利をして国を治めないう外国の支持は得られなかった。カランサは国境問題に関し、少なくとも表面上は断固たる姿勢を示した。彼はメキシコの主権を主張し、パーシングに撤退を要求した。ピヤやPSDへの取締り強化を要求するアメリカに対し、非公式に協力を約束したカランサは、腹心の部下ゴンザレス、ナファラテが離反しないよう細心の注意を払って対応した。ピヤ追討軍侵入初期の段階で、パーシングは物資の輸送に鉄道の使用を求めた。カランサはこれに対する公の回答を拒む一方、物資の受取人が市民であることを条件に、密かに許可を与えていた。しかしパラルでの事件のあと、カランサは早期撤退を求め、態度を硬化させた。<sup>37</sup>

カランサはPSDについて対応を迫られると、二月にピサニャなどを逮捕した。アメリカがさらに要求を強めると、ジェネラル・リカウトは6月12日、PSD再興を企てたとしてデ・ラ・ロッサを拘束した。このような密かな協力をアメリカは殆ど評価しなかった。カランサは生き残りをかけ、細心の注意を払いながら、両国を交戦状態に持ち込むことを密かに企んだ。両国の衝突は国境線上ではなくチワワで起った。<sup>38</sup>

6月16日、メキシコ軍チワワ司令官ハシント・トゥレビニョはパーシングに書簡を送り、チワワ州内のアメリカ軍部隊が現在位置から北の方角以外の場所に移動することを禁止すること、もしこれが守られない場合は、アメリカ軍を武力攻撃すると伝えた。パーシングは素早く反論し、アメリカ軍は如何なる動きも規制を受けておらず、我々は自らの判断でどの方向でも動かすことが出来、もしアメリカ軍部隊が攻撃を受けたら、その結果発生する事態についてメキシコ政府は全責任を負う、と回答した。カランサはその後もパーシングへの警告を公にして繰り返し、アメリカは彼の警告に激怒した。<sup>39</sup>

パーシングがトゥレビニョとメッセージのやり取りをしていた頃、ドゥブランの本営から東七十マイル、フアレスとチワワ市を結ぶ幹線道路と鉄道線路上にあるピヤ・アウマダに、カランサ軍の三分の一に当る一万の軍勢が集結しているとの情報をパーシングは受け

取った。若しこれが事実であればカランサ軍勢力はパーシングのそれと匹敵することになる。パーシングはメキシコ軍の勢力と意図を確認するため部隊を派遣することにし、第十騎兵大隊C部隊隊長チャールス・ボイド大尉を呼んだ。パーシングはボイドに状況説明をすると共に、カランサ軍守備隊が駐屯する町に入る事は愚行であると戒めた。

ボイドのC部隊はパーシングに会った6月17日の夜、意気高らかに東に向かった。ドゥプランの北約四十五マイルにあるオホ・デ・フェデリコ基地からもルイス・モレイ大尉が指揮するK部隊が、カリザルの手前にあるサント・ドミンゴ牧場でC部隊と合流するために出発していた。ボイドのC部隊にはもう一人の将校、ヘンリー・アデア中尉と四十一人の兵士、一方のK部隊にはモレイ大尉以外に将校はいなく、兵士三十九人、合わせて将校三人と兵士八十人であった。五十マイル以上の行軍の後、両部隊はサント・ドミンゴ牧場で合流し、ボイドが統一部隊の指揮官となった。

その夜ボイドは会議を開いた。三人の将校に二人の民間人が加わった。ボイドが連れてきたモルモン教徒のガイド、レムエル・スピルスバリーと牧場のアメリカ人監督W. P. マッケープであった。ボイドは、カリザルをまっすぐ抜けてビヤ・アウマダへ向かう、と自分の考えを披露した。マッケープは注意を促した。カリザルの町にある建物の一部は日干し煉瓦で、防弾性を備えていて、町を通り抜けるのはかなり危険が伴うので、町を迂回するよう進言した。他の三人も反対したが、C部隊のボイドとアデアはメキシコ人を見下し、強硬姿勢を崩さなかった。モレイは自分に勇気がないと思われなくなかったので、カリザルには自分が先頭に立って進むよう申し出た、そして若し一人で行けと言われればそれに従った、と後に証言した。<sup>40</sup>

翌日6月21日午前4時、ボイド大尉の騎兵部隊は早足で牧場から九マイル離れたカリザルへ出発した。戦闘を予期し、不必要な物はすべて残し、水筒と肩にかける弾帯のみを携えた。最悪の事態を想定したモレイは、貴重品をマッケープに預け、万一帰らない場合に備えた指示を与えた。

ボイドの部隊が近づいた未明、カランサ軍約四百は町の手前にある低い尾根で戦闘位地についていた。メキシコ軍は動かなかつたので、ボイドはガイドのスピルスバリーを送って隊長にカリザル通過の許可を求めた。スピルスバリーは、カリザルに脱走兵がいるとの報告を受けていることを口実に使うつもりになっていた。隊長と思しき男はヘネベボ・リバスで、彼は敵意を顕にし、ビヤはこの辺りにはいない、お前等の敵はこの俺たちだと言った。この男と論議をしても始まらないと思ったスピルスバリーは、そのメキシコ人にボイドのところまで一緒に来てくれないかと促しているときにカランサ軍ジェネラル・フェリックス・U・ゴメスがやって来た。

ゴメスは礼儀正しかったが、同じように頑なにアメリカ軍がこの町を通ることは硬く禁じられている故、拒否すると言った。しかし、ここで待つのであれば、ビヤ・アウマダから司令官ハシント・トゥレピニョに打電し決済をとり、許可が下りれば、歓迎する、とも

言った。ボイドはスピルスバリーに、お前ならどうする、と聞いた。スピルスバリーはサント・ドミンゴまで引き揚げて、防備を固めてメキシコ人を迎え撃つ、と応えた。ボイドは撤退を拒み、町を通り抜ける、と告げた。スピルスバリーが通訳する前に理解したゴメスは、スペイン語で「俺の屍を越えれば通過してもよい」と言って自分の部隊へ戻った。ボイドとスピルスバリーも戻った。ボイドは全員を下馬させ、C部隊を左翼、K部隊を右翼に展開させた。メキシコ軍が発砲すると、K部隊は前進した。<sup>41</sup>

一方的な戦いであった。ボイドのC部隊は勇敢に左翼へ突進した。騎乗のボイドは二度にわたって傷つきながら前へ進めたが、ライフルの弾に額を撃ち抜かれて転落した。C部隊を引き継いだアデアも直ぐ殺された。K部隊はC部隊との連絡を絶たれ、戦闘目標に達する前にモレイ大尉が重傷を負った。指揮官のいない七十人のアメリカ軍は圧倒的な敵を前に混乱して後退した。アメリカ軍が蒙った犠牲者は死者十人、二十三人が捕虜になった。メキシコ軍はゴメスを含む四十五人の将校と兵士が死んだ。アメリカ軍の射撃は正確であった。

監督マッケープは部隊を送り出してから牧場に残った。朝八時から九時の間、五人の騎兵が疾走してくるのを認めた。主のいない二頭の馬、荷を積んだラバがその後に続いていた。皆ライフルと銃弾を持っていた。マッケープは彼らを西へ向かわせた。午前中かなりの落伍者が牧場を通り抜けて行った。牧場の雇い人たちは逃げ、三人のメキシコ人と一人の支那人のみになっていた。その夜マッケープは牧場から離れた藪の中で眠った。戦いから二日経った23日の朝、マッケープは風車小屋でモレイ大尉と負傷した四人の兵士を発見した。彼等は翌日第十一騎兵大隊のロバート・ハウゼ少佐の分遣隊によって救出された。

42

ボイドとモレイがドゥブランを出発して以来、パーシングは通信を断たれていたの、カリザルの惨事が耳に入るのは遅かった。唯一の情報源は戦闘からの落伍者であった。一方カランサはサンアントニオのジェネラル・フンストンをはじめ、あらゆる方面に電報をばら撒いた。パーシングは22日、フンストンから電報を受け、事件の釈明と、何故命に背いてカリザルのような遠距離に部隊がいたのは誰の責任かを問われた。パーシングは何が起きたのか、何処でどう間違ったのか知ろうと苦慮していた。彼は事実を知るまでは、メキシコ側から仕掛けられたと思っていた。もしそうであれば、フアレス＝チワワ鉄道線を切断し、許されることなら、チワワを占領しようと考えていた。情報が寄せられる毎に、実際に起ったことを理解し始めていた。最後に負傷したルイス・モレイがドゥブランに戻ってきて、カリザルでの戦いはメキシコ人ではなくボイドが仕掛けた、という不愉快な事実をパーシングは受け入れた。フンストンはパーシングにドゥブランに留まるよう指令した。カリザルの戦闘を最後に、その後追討軍は誰とも戦う事はなかった。<sup>43</sup>

ワシントンでもウイルソンと國務長官ランシングはカリザルの戦闘はカランサ軍によるものであるとして、直ちに激しい怒りを表明し、二十三人の捕虜の引渡しを求めた。同時に国防相はジェネラル・フンストンにリオグランデにある全てのインターナショナル・ブ

リッジを押さえ、メキシコとの全面戦争に備えさせた。こうして両国間の緊張は一挙に高まった。メキシコの主要都市ではカランサが仕組んだ反米デモが起き、望んではないアメリカとの戦争の気運が一気に高まった。しかし、ウイルソンの激しい応酬を受け取ったカランサは考えを変えた。危機感を抱いたカランサはジェネラル・トゥレビニョに直ちに二十三人のアメリカ人捕虜を列車でエルパソまで運び、返還するよう命じた。6月29日、捕虜はエルパソに到着した。制服を剥ぎ取られ、一人は毛布に包まっていたが、捕虜の状態は概ね良好であった。7月4日、カランサは両国間の緊張を終わらせるよう率直で友好的な交渉を申し出、戦争を望んでいなかったウイルソンは直ちにそれを受けた。<sup>44</sup>

37. James A. Sandos, "Rebellion in the Borderlands, Anarchism and the Plan of San Diego, 1904-1923", University of Oklahoma Press, 1992, P149
38. Ibid. P150
39. John S. Eisenhower, "Intervention! The United States and the Mexican Revolution, W. W. Norton & Co., Inc., 1913-1917, P291
40. Ibid. P294
41. Ibid. P295
42. Ibid. P297
43. Ibid. P298
44. Ibid. P299